

創設期の回顧と心に浮かぶ人々

都留 春夫

1. 大学創立

国際基督教大学という、新しいキリスト教主義の大学を創設する活動に、私が参画しようとしたのは、1947年秋に、同大学研究所の第1回研究生になろうと決めたときからです。それから2年足らず続いた研究所の所員並びに研究生が描いていた夢は、東京大学と同レベルの8学部から成る第1級の総合大学でした。

しかし1949年の御殿場会議で決定された国際基督教大学の発足の姿は、学生総数600（1学年150人）の小さな教養学部で、将来は教育、行政、社会事業の三つの大学院をつくり、更に教授陣容及び施設等が充実すれば大学院を拡大していくというものでした。同時に研究所は1949年夏に解散し、所員・研究生共に、将来の国際基督教大学との関係は、一応そこでご破算ということになりました。その秋からの米国留学が決っていた私は、この突然の解散の影響は受けませんでした。それまでの地位や職を捨てて、研究生になっていた人々の中にはかなりの痛手をこうむった人がいたと思います。

あとからふりかえって考えてみると、この大学が従来から日本にある総合大学の形態を範とせず、全く新規の構想で出発したということは、「明日の大学」を目指す国際基督教大学の独自性を際立たせ、実験的な試みを次々に実施遂行することを可能にしたという先見の明に富んだものであったといえるでしょう。

2. 教養学部

大学要覧の第1号(1953-55)をみると、教養学部は人文科学、社会科学、自然科学の3学科から成るとしてありますが、同じ要覧の後のほうのページにある教職員名簿では、英語学担当のDr. Robert H. Gerhardが英語学科科長になっていますから、発足当初から英語学科は人文科学科からの独立が決っていたのだと思われます。これが後に語学科となり日本語をはじめ、ドイツ語、フランス語、スペイン語等の授業科目も人文学科からこの学科に移されることとなります。当初英語学科という学科は日本の大学では独立していないのが普通でしたから、多くの学生は英文学科と混同していました。

行政職員として学生指導を担当するつもりで、1952年に国際基督教大学からの招きに応じて就職することに決めていた私は、同年4月、突然Dr. Gerhardに面接を求められ、その結果英語会話という授業の助手をつとめることになりました。

3. 農村厚生研究所と栄養研究所

教養学部が発足した1953年春、国際基督教大学には教育、農村厚生、栄養の3つの研究所があり、いずれも将来大学院になることが期待されていました。

農村厚生研究所の初代の所長はDr. David E. Lindstromです。イリノイ大学の農村社会学の教授でしたが、米国の中西部の農家のどこでも見かける農場主のような親しみやすい風貌の方でした。私の留学先がイリノイ大学の農業系大学院であったため、同教授にお会いすると、イリノイであった多くの級友のことが思い出されました。この研究所は日本の農村生活問題の研究を主としていましたが、その他に教育とエクステンション事業を行っていました。教育としては学部生及び大学卒の研究生のためのセミナーがあり、数名の学部生を学生助手に採用し、月額3,000円の奨学金(12ヶ月)を支給し、調査などの研究に参加させていました。全国の大学農学部卒(あるいは同等の学歴所有者)を毎年5名研究生に採用し、月額9,000円(授業料及び

生活費の補助)を支給していました。Lindstrom 教授が帰国された後、大学院コースに発展するまでに至らずに活動が終了したのは残念でした。大学附属の農場には牛、豚、鶏が飼育されており、中でもジャージー種の乳牛からとれる脂肪分が特に濃厚な ICU Milk の新鮮さと味のよさは学外でも有名でした。

栄養研究所は、初期の教授陣の中に長い間中国で宣教師活動をしておられた栄養学専門の Dr. J. Claude Thomson がおられたために発足することができたのだと思います。私のイリノイ大学での修士号が動物栄養学で取得したもので、英語学科の助手に決まる前に、栄養学の助手をしないかという誘いをうけましたが、辞退しました。Thomson 教授は精力的な活動家で、学生の健康調査、健康教育を積極的に担当され功績をあげられましたが、数年で任期満了、帰国された後は、この研究所の活動は進展しませんでした。Thomson 教授は長く WHO で活躍しておられたので、来日中も顧問をされ、研究結果を WHO に報告しておられました。

Thomson 夫人は中国語が達者で香港からの留学生の世話を熱心になされ、料理が上手なこともよく知られていました。また、講師として英語学科の授業を担当しておられました。

ご夫婦揃って学内を散歩しておられた元気な姿が今でも心に浮びます。

4. 教育研究所

教育研究所の活動は教養学部の発足より前に開始されていました。そもそも国際基督教大学設立の主目的のひとつが、新しい民主日本の市民を育成するために重要な役割りを果たす教員を養成することと教育の学術的研究を振興するための大学院を早急に設立することにありますから、その前身としての教育研究所の教授陣容、研究内容を充実させることには、特に力が入られていたと思います。この研究所の設置の趣旨とその課題については初代の研究所長・大学院部長の日高第四郎教授が「ICU教育研究」の第1号の冒頭で詳細に述べておられますので、それをここで繰返し紹介することは致しません。

大学要覧の第1号によると、発足当初の研究所は専任教授5名、非常勤4名を擁しているとされています。

5. 研究課題

教育研究所の研究課題としては次に示す4つの基本問題と2つの緊急問題が選ばれていました。

1. 新教育の為の教育哲学
2. アジアに於ける基督教教育原理の探究
3. 国際理解の教育の調査及び研究
4. 教育科学の基礎学としての教育心理学及び教育社会学の研究
5. 視覚聴覚教育の研究及び実験
6. 大学学生の補導問題の調査と研究

発足当時のこれらの研究活動の内容については「教育研究 1」(1955年)の所報欄に報告がのせられています。

1. の教育哲学については、Rockefeller 財団からの研究費の交付を受け(1955年)、「民主主義教育の哲学的基礎づけ」を主題とする研究が、小島軍造教授を中心にした研究チームにより緻密な計画の下に進められ、1960年12月に提要の改訂・増補版およびその英語訳を刊行することによって、一応の終結に達しています^(注)。

小島軍造教授がこの大学の教授に就任されたのは1953年で、同67年に学部教授を停年退職されるまで、キャンパス内に居住しておられ、ご夫妻揃って日常生活では控え目で比較的言葉少く地味な生活をしておられました。教育・研究指導にあたっては懇切周到で、よく後輩の面倒をみておられました。時たまお宅を訪問し心よく迎えられた時のおふたりの笑顔は忘れられません。

教育の基督教的原理の研究を担当された関屋光彦教授は1966年まで専任教授として教育哲学を担当しておられましたが、後年ご夫妻で深大寺の私宅を

学生寮にして、多くの女子学生を育てられました。この学寮は今日もなお伝統ある学生生活の場としての活動がつづけられていると思います。

国際理解の教育を研究しておられたのは高木とり講師ですが、研究室には国内・国外の新旧の学校教科書が山積になっていました。

教育心理学は1956年度から岡部弥太郎教授、古畑和孝助手によって研究が開始され、当時の新設校としてはめずらしい内容のととのった実験室が作られました。

視聴覚教育担当の西本三十二教授は意志の強い実行力に富んだ方でしたが、視聴覚教育研究協議会、放送教育研究協議会の二つの全国的な研究協議会の開催に指導的な役割りをとられ、学会への発展の基礎を礎されました。本館4階に立派なスタジオ、機械室、準備室が完成したのは1956年の10月でした。

1956年から2年間大学からの推薦でRockefeller財団の研究者として渡米しColumbia大学に留学した私は、New Yorkで母校を訪れられた西本先生ご夫妻にお会いする機会があり、中華料理店にお招きを受けたのは、懐かしい思い出です。New York滞在中には西本教授の長男の洋一氏とも親しくおつきあいをする機会がありました。視聴覚センターの助手として初期におられた杉山貞夫、上林二郎のお二人のことは、今もときどき思い出しますが最近はどうしておられるのでしょうか。

社会学関係ではDr. Gordon Bowlesが客員教授として来学されましたが、その時非常勤講師として原喜美氏が、研究協力者として津田塾から来られ、その後常勤として勤められることになり、青年心理や教育社会学の授業を担当、また学生部の仕事にも学生相談を中心にして積極的に参画され、停年に達するまで、研究に、教育に、学生指導に、疲れを知らぬご活躍でした。

学生補導の研究は、中心になっていた守谷英次教授が思い掛けず早期に身を引かれたので、あまり進展しなかったように思います。

6. 日高先生と岡部先生

学生補導の領域での実践家になることを志していた私は、最初は英語学の

助手・講師でしたが、1954年から学生指導担当の副学長Dr. Maurice E. Troyer の下で常勤の実務を開始しましたので、当時は教育研究所には直はしていませんでした。1958年にColombia 大学Teachers College からGuidance and Student Personnel AdministrationでDoctor of Education の学位を得て帰国した私は、同年9月からTroyer 副学長の下にもどり、寮アドバイザー、学生指導を担当し、1959年4月に助教授になり、学生部長に就任しましたが、あるとき、教育研究所長・大学院部長の日高第四郎教授の研究室に呼ばれ、私の博士論文は日本の大学教育の歴史を学生指導という観点から研究しており努力は認められるが、第二次世界大戦後の教育改革に重要な役割りを果たした教育刷新委員会の活躍にふれていないのは手落ちではないかというご指摘をうけました。

後で考えてみると、これには、論文に手を加え日本語にして発表せよという示唆が含まれていたのではないかと思われるのですが、その時にはそれに気付かず、論文の一部を「教育研究」その他に発表するのみで終わらせてしまったのは、今更ながら残念なことです。また、日高所長の心のうちでは、私が研究所の一員として学生補導関係の研究を進めないことを齒がゆく思っておられたのではないかと思われ、申し訳ないことをしたと思っています。

当時の大学での私の職務は、行政職員として学生部で働くことが本務で、授業の担当や卒論研究の指導については心理学の主任の岡部弥太郎教授からの要請がある場合にのみ引受けるかどうかを考慮すればよいことになっていました。1958年に私のColombia時代のThesis AdvisorだったDr. W. Max Wise が1年の契約で来学し、大学院発足当初から開講が望まれていた学校および大学におけるGuidance, Counseling, Group work のコースの授業を担当されたので、私が手伝うことになり、Wise 教授が米国に帰られた後は、私がその3コースを担当するようになって、今日に至っています。

岡部教授からは宗教心理学を教えないかという示唆をうけたことがありますが、引受けられませんでした。岡部教授は学会のシンポジウムに発題者として出るようにと推めて下さる時には、否とは答えられない強さを示されま

したが、授業の担当について先生から押しつけられる思いをしたことはありません。いろいろな機会に親しく誘って頂けたことは感謝にたえません。

7. Dr. Wise と学生指導問題セミナー

Wise 教授の残された功績はいろいろあります。1958年から9年にかけて北海道・東北・東京・関西・中国・九州でカウンセリングと学生指導の研修会の指導をされましたが、どこに行っても、日本旅館に泊り、古道具屋を探して、渋い日本の家具や食器などを見付けるのをたのしんでおられました。1959年夏に帰国される前、1ヶ月にわたり、国際基督教大学において、第1回学生指導問題セミナー（Seminar on Student Problems in Asia）を開き、その中心になって海外からの参加も合わせて約35名の参加者の研究指導に当られました。このセミナーの記録は国際基督教大学学報1-Dとして刊行されています。またセミナーの大意は「教育研究6」（1960年）に紹介されています^(注)。

同教授が帰国された後も何回かつづけて同様のセミナーを開いてほしいという要望が国内各地の大学関係者から出されましたが、私の力不足もあり、遂に再現するに到りませんでした。

8. 英語教育担当の人々

各科教授法と教育実習には、大学創設当初から力が入れていましたが、中でも英語教授法については、学部学生の全員が最初の1学年間英語集中授業を受けることになっていましたので、この大学の学生には教員免許がとりやすくなっていました。教授法を長年担当されたのは非常勤講師の吉沢美穂氏でしたがその特色のある教授法は学外でもよく知られています。

初期の頃の「教育研究」には、英語教育担当の諸教授の活動報告が記載されていません。主任教授のDr. Gerhard は1952年にこの大学に来られるま

では、夫妻共に仙台で教鞭をとっておられ、東北なまりの日本語が達者でしたが、必要にせまられない限りあまり人前では日本語で話されることはなかったようです。私共夫婦は、親しくお宅に出入りを許されていましたが、会話はいつも日米まぜこぜ、あるいはご夫妻は英語、私たちは日本語という組合せでした。教授は1963年4月中旬に突然心筋梗塞で帰らぬ人となりました。ご夫人は現在カリフォルニアで老後を過しておられ、第1回の卒業生でRedland大学で教鞭をとっている大和田康之氏が、お世話をしています。教授が教室で大きな口をあけて正確な発音の指導をされるのには、学生が真似をするのが大変だったようです。一緒に発音を担当していた太田フサエ講師の指導の厳しさに涙を流した学生もいましたが、同講師の学生に注がれる教師としての愛情は並々ならぬものでした。

英会話の授業は「話し方」あるいは“Oral Expression Course”と呼ばれ、関西学院から移って来られたMcKenzie教授が自作の教材を使って特色のある授業を進められました。そのために教材作りが大変で授業のある前の晩、助手の私もお手伝いをして、徹夜で作業することがよくありました。教室での私の役割は大きなテープレコーダを運び込み、その前に学生が2人ずつ出て会話をするのを、録音再生して、指導をすると共に、毎回会話の結果を採点することでした。私がレコーダーのスイッチを動かすのを面白がって、学生は私のことをスイッチボーイと呼んでいました。

McKenzie教授は、（ご自分ではカナ書きの場合マッケンゼーと書いておられましたが）日本語で講義やスピーチをするのが得意で、ユーモアをまじえた関西弁の話術の上手さは抜群でした。専門領域が広く、英語の他に、日本語、言語学、産業心理学、言語心理学などの授業でも開拓的な仕事をされました。現在の日本語科の基礎を築いたのはMcKenzie教授と小出詞子講師です。また今でも売店に少し残っているICUのバッジは先生がつくった図案によるものです。

英作文にはCompositionとPattern Practiceの2コースがありましたが、前者を最初に担当されたのはMcKenzie夫人と最近津田塾大学の学長に

なられた天満美智子助手でした。後者の方はMiss Mary Lee MacDonaldが最初の3年間担当されましたが、Michigan 大学で開発された教授法を取り入れられた新鮮な授業で、同講師の若さのせいもあって学生間では人気者でした。

以上が初期の頃の英語教育の主な教育スタッフの横顔です。

9. 語学研修所

英語教育の関係で、学部学生対象でなく、広く一般に門戸を開いていたのが、語学研修所です。これは教養学部の発足に先立って1952年4月に開設され、次の年に教養学部に進学することを希望する学生を募集して、教養学部1年次に当る英語教育をしましたが、1953年以後も数年間活動をつづけ、学部生にはならないで英語の集中訓練だけを受けたいという研究生を受け入れました。留学予定の近い人々、牧師、教員などの応募がありました。また夜間講座や、夏休み中の集中研修などの計画も実施され、主として現職の中学高等学校の教員などに英語を教えていました。

各種の研究所や研修所は、広く一般社会人に向けて再教育を受ける可能性を積極的に開いていましたが、次第にその面での活動は不活発になったと思います。これは、大学院教育におきかえられたからだとも考えられますが、内地留学のかたちで来学し研修・研究をする研究生の数は今のほうが初期の頃よりも少なくなっているのではないかと思います。

10. 大学院教育学研究科

1957年に教養学部から第1回の卒業生が出るのに時を合わせて、大学院教育学研究科が発足しました。2年後に最初の修士が生まれますが、その時の最終口述試験には各学生の専攻領域以外の分野を担当する教授が必ず出席し、専門以外に広く教育についての知識や、国際基督教大学大学院修了にふさわしい学識をそなえているかを審査することになっていました。

大学院の授業の一部であった Wise 教授の担当する学生指導に関する各コ

ースは、現役の大学・高校の教職員に積極的に呼びかけ、院生と共に授業を受けることを奨励しました。このような形ですすめる授業は、現在も多くあっていいのではないかと思っています。

11. 教養学部教育学科

教養学部教育学科が生まれたのは1962年4月です。スタッフは教育研究所の所員を主とし、科長は小島軍造教授でした。それまでは、社会科学科の教育学専修課程になっていましたが、大学院に教育学研究科がある以上、そこに進学するための基礎教育をする学科が独立して存在すべきだという意見が教育系の関係者の中で高まりました。一方には、教養学部のリベラル・アーツとしての特色が、次第に早期に専門化される傾向が増す程、薄れることを恐れ、リベラル・アーツはあくまでも人文・社会・自然の三科学科にしておくのが理想であるとする考え方があり、両者の間の意見の調整が大変でしたが、結局3年次・4年次の学生のみを在籍させる学科にするということで懸案が解決されました。2年次の終りに教養学部の各科から教育学科へ転入させるというかたちが取られました。数年後にこれが、4年制の学科になります。

12 心理学専修課程の統合

1966年4月に私が教育学科長・教育研究所長に任命された時には、それまでの社会科学科心理学専修課程と、教育学科教育心理学専修課程が一本化し、教育学科心理学専修課程になることが決っていました。その頃から、教育学科の学生は必ず各科教授法、教育実習を含む教職課程の授業に登録し、教員免許を取得することを義務づけるという方針がくずれ始めました。これは惜しいことだったと思っています。一本化することによって当初の心理学研究室の活動は強化されましたが、その後次第に心理学を担当する教員の定員が、二学科の一つづつの専修課程をもっていた頃に比べると縮小される傾向が生まれたと思っています。

13. 専攻科その他

教育学科の誕生と同時に教育学専攻科が新設され、主として現職教員の再教育、英語と理科の教師としての1級免許取得の資格を与え、また高度の専門教育や教育原理に関する認識を深めさせ、あるいはカウンセリング、心理テスト、視聴覚教育の専門技術の習得をたすけることが目的とされました。専攻科に入学することを望む学生（現職教員）の数は、今より発足当初の頃のほうが多かったのではないかと思います。

私が担当していたカウンセリング関係では、1963年頃から数年間、大学院生の実技訓練のため、本館4階の心理学実験室にカウンセリング・センターを開設し、学外からの来談者を受け入れ、手数料をとってカウンセリング・サービスを実施したことがあります。また、当時まだ学内に居住していた私は、自宅を開放して、毎週1回夜、三鷹市内の中学・高等学校の生徒相談担当者のために事例研究会を開き、地域へのサービスを実践したこともあります。1966年に学内の私の住宅が延焼により焼失し、学外に居を移さねばならなくなったのと、次第にはげしくなった学内紛争が長続きしたために、これらの計画は中断のやむなきに至りました。

14. おわりに

この小論では、教育研究所、大学院教育学研究科、教育学科の活動を中心に、国際基督教大学の35年の歩みをふりかえる予定でしたが、初期の頃の思い出だけで紙面が尽きてしまいました。このあとの発展の回想は、本号の他の執筆者によってなされることと思います。

こうして初期の歩みをふりかえり、現在の状況と比較してみると、本学の現在の教育学の原理と応用・実践に関する研究と後継者の養成の活動は、めざましい発展をとげてきたことがわかると思います。しかし、一方において、発足当初は日高第四郎所長兼大学院部長の強力なリーダーシップと推進力によって、はっきりした目的のある充実した活動を、規模が小さいなら小さいなりに、展開していたこともたしかです。現在は歴史ができ、伝統や慣習が

生れ、巾広い実践が、研究に教育に、実技指導に展開されるようになっていきますが、初期の頃を感じられた、新しいことを実験してみようとする意欲を継続させることについては、いまの教育学関係の研究所、研究科、諸研究室には多少の疲れが見えてきたようにも思えます。もともと教育研究所の英語名が、Institute of Educational Research and Services となっていることを考えると、サービス面での現職の人々や一般の社会人、地域の人々に対するサービス面が弱くなっているように感じられるのですが……………。

(1988. 11. 25)